哲学学習会②「弁証法」　　箱崎勝彦

はじめに　　哲学とは。哲学を学習するとは。

哲学（philosophy）（ギリシア語）Φιλο―σοφία

　知を愛し求めること（愛知）

　　σοφία　　技術・技芸に秀でていること。巧みさ。熟練、術知；
　　利口さ、利発さ、聡明さ；知恵、才知；
　　知識、学識、博識

　　σοφιστής　①一芸に秀でた者、専門家、巨匠；案出者
　　②賢者、知恵者、知者、学者
　　③ソフィスト、詭弁家

　　賢人、知者、有識者、もの知り博士、博覧強記

ソクラテス「私は愛知者であって知者（σοφιστής）ではない」

（ラテン語）sapiens[1]　賢明な、聡明な、分別ある

　　Sapiens[2]　①分別ある人、賢人、哲人
　　②美食家

　　Sapientia　①賢明、洞察、英知、分別
　　②哲学

homo　sapiens　　cf. homo stultus
　‖　　stultus[1]　愚かな、愚直な
ヒト（現生人類の学名）　　stultus[2]　愚人、ばか者

Wissenschaft(独)　学、学術、学問；科学；(特に）自然科学

21 世紀に至る科学・技術の進歩；原始・古代人に比べれば比較にならぬ位の膨大な正確な知識を得た、得つつある。日進月歩。

＝認識のひろがり、深化。

⇒しかし立ち止まって反省してみた時、本当に人間は賢いか。
知恵ある人（ホモ・サピエンス）といえるか？
昔の人より、ずっと賢くなってきているか？

↓

大疑問!!
人間の愚行、蛮行、相互殺戮、自然破壊、
人類絶滅の危機・・・・・

何を知るのか　　ご飯の炊き方、鉛筆の削り方、服の縫い方、家の建て方・・・・
Know(how to)

何を求めるのか　人間精神、人間活動の目標、追求し実現しようとする価値、対象

〈学芸〉

真　真理　学問、科学
- 自然科学　〈偽〉
- 社会
- 人文

善　実践　行為　道徳、倫理　〈悪〉

美　芸術
- 美術　〈醜〉
- 音楽
- 演劇
- 文学
  - 創作
  - 研究

聖　宗教　信仰　〈俗〉

超人間的、完全無欠、全知全能、絶対善

この目標を達成したとき、この対象を把握したとき、この価値を実現（獲得）できたとき、人は、大いなる満足～幸福～生きがいを感じる。尊敬、敬愛、愛慕、尊重、崇拝。

真理　真なる知識

物質を根元とする客観的世界（の事物）の人間の理性（脳）への正確な反映

経験に基づく　感覚、見る（視る）、聞く（聴く）、嗅ぐ、触る、味わう・・・・

↓

観察　望遠鏡、顕微鏡、X 線、CT、エコー、

個々の事実、確認、枚挙、→帰納、推理

→一般的（普遍的）命題

↓

実験、実証（実践）

↓

《真理認識》

私説、仮説

↓

通説、学説

↓

理論（法則、原理）

先験的、先天的　知識

霊感、奇跡、啓示、お告げ

よく考える（think, denken）

思う（憶う、想う）、思考、思索、思惟（シイ、シユイ）、考察・・・・

「人間は考える葦」（パスカル）　「我思う、故に我あり」（デカルト）

何をどう考えるのか。　対象と方法

当てずっぽうに考える。勝手に思う。想像する。推理する。推測する。

空想、妄想、幻想----オカルト、幽霊（超能力？）

正しい筋道を通って、対象の真実に迫る
真
↕ を確かめ、吟味する（証明）----（反証可能性）
偽（似而非）
私説、仮説、通説、学説、理論

哲学　　世界観・人生観の学
　この世に生きる一人の人間として抱く根本的信念・信条
　「これが私の人生観だ。世界観だ。・・・・」
　各人の経験、知識にもよるが、
　（個人的、主観的、そしてしばしば独善的）
　　↓
　客観的、普遍的、社会的、歴史的、弁証法的、学問的、科学的
　世界観、人生観
　世界を全体として理解する場合に何が本源的なものか？
　　唯物論⇒（長坂氏担当）
　　観念論
　唯物論的・弁証法的世界観、唯物弁証法的・科学的世界観
　人生観　人間がいかに生きるべきか、人間が人間として生きる（動物が生きる、植物が・・）
　　ただ生きるのではない。よりよく生きる
　　↓
　　善美な生き方、善美なことがら
　世界観　人間（自分）が生きている、この世界は何か。どうなっているか。
　　何があるか。自分が存在しなくても世界は存在する。
　　宇宙、地球、生物、動物、人間、無生物（無機的世界）
　　この宇宙には地球以外に生物の居る世界（天体）はあるか？

弁証法
　物事（世界）単純で一様なものとして個別的、固定的、絶対的、恒常不変なものとしてとらえる。認識する。⇒《形而上学的》
　～がある。　～は～である。
　　↓
　～に成る。　～が成る。
　物事を多様な、複雑な構造的なものとして、しかも相互（依存）関係しながら、
　無限の過去から無限の未来へ変化、運動、発展（成長、進歩、進化・・・）
　しつつあるものとしてとらえる。（現在進行形）
　ｉｎｇの論理
　「万物は流転する」　「諸行無常」　「諸法無我」
　　相互（依存）関係----(直接、間接)　因縁起果

《形而上学的認識》

知る、（明白に、正確に）茫漠、混沌とした世界（対象）を

分ける、区別する。

分かる（理解する）

混沌とした全体のなかから一つ一つを分け、区別し、確定し、分類する。相異と相似

不動のものとして静的（スタティック）にとらえる。

ＡはＡ（同語反復的）　ＡはＢ（総合判断）

↓

《弁証法的認識》　ＡはＢに成る

（Ａではない）

世界の（物事の）存在の仕方そのものが弁証法的。

認識の仕方も弁証法的にでなければ真理に到達できない。

弁証法を学び、研究し、磨いて、より確かな弁証法的仕方で科学的探究を続け、

絶えざる努力によって、一歩一歩真理に近づいてゆく。

真理探究の可能性と無限性、永遠性

cf. 不可知論：そもそも人間には世界を正しく認識する能力などない。

真理の認識など不可能。

cf. プラグマティズム：客観的、絶対的真理を認識することはできないが、ある情況で、

ある知識を得て、その知識を応用して、実践して、その時点で、人がうま

くいけば、その知識は相対的に正しい有用な有効な知識といえる。

弁証法　変化-運動-発展（生成、成長、進歩、進化、発展、成熟、劣化、消滅）

ある一つの物事（と認識されていたもの＝ある構造をもっている）の内部の変化

（量的、質的、配置的）

その構造をなすある部分（要素）と別のある部分（要素）との間の対立、闘争

矛盾

一方が一方的に優勢になり勝利し、他方が劣勢になり敗北し、消滅してしまう

＝単純な変化で弁証法的矛盾ではない→発展ではない

矛盾 ⟶ 新しい（より複雑な、より高次の）段階

止揚（アウフヘーベン）、飛躍

ex1) 動物の個体の発生（誕生）→生長→発達→成熟→老化→死滅

種は保存され、さらに進化、発展の可能性。

ex2) 植物の発芽→生長→開花→結実→果実の死→次の世代の発芽

ex3) 人間社会の発展⇒史的唯物論（原田氏担当）